

## 特別研究課題 評価委員会総合所見（事後評価）

研究課題名：地震発生過程の詳細なモデリングによる東海地震発生の推定精度向上

研究期間：平成１１年～平成１５年

評価委員

委員長：平 啓介

委 員：石田 瑞穂、小室広佐子、田中 正之、泊 次郎、渡辺 秀文

評価年月日：平成１６年８月２日

### １．総合評価

- ☒ １ 非常に優れた研究であった      ２ 優れた研究であった  
３ 優れた研究とはいえないが、実施した意義は認められる  
４ 優れた研究とはいえず、実施した意義も乏しい

### ２．研究課題の項目別評価

（１）実施体制について

- ☒ １ 適切      ２ ほぼ適切      ３ やや不適切      ４ 不適切

（２）研究資源について

- ☒ １ 適切      ２ ほぼ適切      ３ やや不適切      ４ 不適切

（３）研究の進め方について

- １ 適切      ☒ ２ ほぼ適切      ３ やや不適切      ４ 不適切

（５）成果と波及効果について

・研究成果の行政的価値

- ☒ １ 高い      ２ やや高い      ３ やや低い      ４ 低い

・研究成果の科学的価値

- ☒ １ 高い      ２ やや高い      ３ やや低い      ４ 低い

・研究成果の波及効果

- ☒ １ 高い      ２ やや高い      ３ やや低い      ４ 低い

### ３．総合所見

本研究においては、東海地震の３次元数値モデルを開発、それに基づくシミュレーション及びスロースリップ現象の評価を実施し、さらには、「東海地震注意情報」など東海地震の新しい情報の実施、中央防災会議の「東海地震対策大綱」の作成などに貢献したことは、高く評価できる。また、地殻変動データの解析手法の高度化により、中央防災会議による東海地震の「想定震源域の見直し」など、科学的、学術的な価値だけでなく、防災対策を行う上で極めて重要な情報を提供できたことは、社会的意義が非常に高い。さらに、歪み計データ、GPS 観測データの補正方法など、気象庁の監視業務に活用されている成果も多く、本研究は、非常に優れた研究であった。

ただし、地震活動評価手法の視覚化手法が未完成であり、この手法開発は完成すべきである。また、潮位データを地震予知に活用できるよう検討すべきである。

さらに、東海地震の３次元数値モデルによるシミュレーションは、手法はある程度開発されているが、シミュレーション結果が仮定した初期値に大きく依存することなど、解決すべき問題がある。今後も東海地震のよりの確な予測に結びつけるため、研究をさらに継続して行う必要がある。